

目次

海月状菌汚染くらげじょうきんおせん

矢野徹やのてつ 005

白い大陸が燃えるときしろい大陸がもえるとき

福島正実ふくしままことみ 043

到着とうちやく

筒井康隆つついやすたか 069

世界の滅びる夜せかいのほろびるよ

平井和正ひらいかずまさ 073

かわいた風

横田順彌よこたじゆんや 085

双星記そうせいき

川又千秋かわまたちあき 119

ひとつの装置ひとつのそうち

星新一ほししんいち 157

海月状菌汚染 矢野徹



五月二十七日午前十一時。

札幌の南五十キロ、広大な原野にひろがる千万平方メートルの千歳基地。第二航空団が置かれている航空自衛隊最大の基地だ。

コンクリートの列線に、F104Jがずらりと鋭い機首をならべ、強い初夏の太陽が、剃刀の刃のように短い翼の影をくつきりと落としている。その影をぬって整備員がいそがしく歩きまわり点検を続けている。すこし離れてF86Dや大型ヘリコプター。そのむこうにC46輸送機が着陸し、荷物を降ろし始めた。爆発物危険と書かれた大きな木箱を幾つもフォークリフトが運ぶ。

飛行場のはずれには緊急発進専用格納庫がある。北部航空警戒管制団第四十五警戒群の各防空監視所がとらえる機位不明機にむかって、いつなんどきでも出動迎撃できるように、二十四時間休みなくパイロットたちが待機している。そこには実弾をこめ

た小銃を持つ歩哨が立っており、常に張りつめた空気がみなぎっている。

仮面のようなその歩哨の顔がほころび、人なつこい微笑を浮かべた。機械が人間を圧倒するような息苦しい基地の雰囲気破るように、どこから現れたのか、一匹の大きな茶色の犬が、のそのそと近づいてきたのだ。耳をぴんと立て尾を巻きこんでいる。「秋田犬だな……」

犬好きの歩哨はその犬を見つめて呟いた。だがその眼が、おやというようにいぶかしげな色を浮かべた。近寄ってくる犬が、どこことなく変なのだ。低くうなりながら迫ってくる大きな犬の姿に恐怖をおぼえた瞬間、その犬は大きく吠えて飛びついてきた。

「うわーっ！」

怒鳴りながらM1ライフルを横にふった歩哨の腕をかすめてすれちがった秋田犬は、狂ったように吠えつづけながら、また飛びついてきた。ズボンが引き裂かれ、足に鋭い痛みをおぼえた歩哨は、反射的に引金を引いた。四発の銃声が大きくひびき、